

芸術的側面を活用した競技振興の可能性

—飛込競技を対象とした量的調査の分析から—

藤原 ゆりの

飛込競技は、演技開始から終了までの時間が 2 秒弱という演技時間が最も短い競技といわれており、18~19 世紀のドイツで飛込競技の前身がみられるなど歴史は古い。しかし、競技施設や競技人口が少ないのが現状である。競技振興を考えていく上で、インフラ整備が重要になるが、飛込競技では、施設建設費が高額になることや膨大な維持費がかかること、採算が合わないことからインフラ整備が困難になっている。そこで、本研究は、飛込競技の芸術性を活かした競技振興策を提案する。芸術を活用した競技振興策を提案する上で、選手のパフォーマンスが重要になってくることから、本研究では、飛込競技の選手・指導者・審判員・競技役員を対象に調査を実施した。ここでは、「①競技コミットメントしている者が、②飛込競技の芸術性を発見し、③芸術を活用した振興策を支持している」という仮説のもと調査を実施した。調査の結果として、最も支持されていた振興策は、練習環境の整備などの「インフラ整備」であったが、ダイビングショーの実施や音響・照明の活用など「芸術を活用した振興策」の支持率もインフラ整備と遜色なかった。それぞれの振興策の支持の間には有意な正の相関があることから、インフラ整備以外の振興策もバランスよく実施していく必要があると競技関係者は考えていることがわかった。また、競技の実績による称賛や、競技に対してお金や時間をかけているなど、外発的なコミットメントよりも、技術を向上させたい、完成度を上げたい、勝ちたい、などの内発的コミットメントを持つ選手関係者のほうが、芸術を活用した振興策を支持していることがわかった。このことから、動機づけと同様に、外発的なものよりも内発的なもののほうがより長期的に競技にコミットメントしており、かつ、向上心を持ち、より能動的に競技と関わっている関係者であると考え、仮説は立証された。そして、調査の結果をもとに、①飛込競技にエンターテインメント性を加えたダイビングショーの実施、②競技会の観戦者が観戦しやすくなるためのシステム化、③選手が競技を続けやすい環境の整備、という振興策を提案した。